

2023 年度

文学部 総合型選抜 I 期(文章読解型)

【小論文】

60 分 100 点

今から十年前の三月、私たちは、東日本大震災という大きなカタストロフィを経験しました。その傷も癒え切らないうちに、今回のコロナ禍に直面することとなったわけです。そして、これからも、大なり小なりカタストロフィは起こり続けることでしょう。カタストロフィは地球レベルばかりではなく、個々の人間関係、いや、一人の人間の心のなかにおいても起こりえることです。しかし、同じ心理的、物理的なショックを受けながら、それに軽々と耐えていける人と、深く傷を負い、なかなか立ちあがれない人がいることも確かです。

皆さんは、「レジリエンス」(resilience)という言葉をご存じでしょうか。二〇一〇年代から欧米の企業を中心に使用され、日本のビジネス社会でも、会社の研修などでしばしばクローズアップされる用語です。要約すると、「逆境や困難、強いストレスを感じる状況にも適応する精神力と心理的プロセス」をいいます。語源は、ラテン語で「跳ね返り」を意味する「resilio」。別の英語に置き換えると、「rebound」ですね。端的には、「回復力」「復元力」の訳語が相当します。

ウェブ上でアメリカ心理学会が提唱している「レジリエンスを築く十の方法」を読みました。そこには、親戚や知人と良い関係を保つこと、危機やストレスに対して、これを耐えたい問題とといったネガティブなかたちで捉えないこと、自分の希望を可視化することなどが挙げられていました。一読して、どうとしない方法です。私なら、もっとポジティブに、芸術やダンスや自己表現によつてネガティブな気分から自分を解放する、そんな一項目をつけ加えることでしょう。しかし、この提言を読みながら、一つだけ私の注意を引きつけた項目があります。それは、「変えられない状況は、これを受け入れる」、それが「レジリエンス」を鍛えるというメッセージです。

この一行を読んで、私はすぐに、アメリカの哲学者ラインホルド・ニーバーの有名な「祈り」の言葉を思い出しました。引用します。

「神よ、変えられないものを心穏やかに受け入れる力を与えてください。変えるべきものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えてください。」

これは、信仰や立場の違いを超えて、深く胸に届くよい言葉です。たんに受け入れるだけではない、そこからよりポジティブに、「変えるべきものを」しっかりと見極める力が必要だ、とニーバーは述べています。諦め、諦念からの再出発の意思がそこでは示唆されています。

さて、私が「レジリエンス」という話題を取り上げたのは、この「受け入れる」という姿勢が潜在的にもつ可能性について、一つお伝えしたいと思うことがあったからです。「受け入れる」という態度を、けつしてネガティブな意味で受け止めてはいけません。この用語には、じつは、「回復力」「復元力」に留まらない、皆さんがこれから生きる人生の大切な意味が隠れているからです。

皆さんは、自分の考え方に柔軟性があると感じておられるでしょうか。自分の気持ちをコントロールできる自信がおりですか。どんな状況でも「何とかなる！」という樂觀を持てますか。いずれも、「レジリエンス」の指標となる問いかけです。

じつは、若い時代の私は、これら三つの問いにかぎり、ほぼ落伍者に近い後ろ向きな人間でした。しなやかさに欠け、自分の気持ちが抑えられず、何ごとでも無理と決めつけ、物事を悪く考えがちでした。ただ、それとはべつに、一つだけ、自分を支えてくれたものがありました。それは、感謝の気持ちです。感謝の気持ちの大切さに気づくこと、それが、「レジリエンス」に通じる大切な力だと私は言いたいです。では、感謝の気持ちは、どうすれば生みだせるのでしょうか。

それは、自分という人間の小ささの自覚からです。その自覚は、何かしら「大きなもの」との出会いから生まれます。「大きなもの」は、宿命のように私たちの前に立ちはだかります。信仰に身を委ねている人は、「神」とそれを名づけることでしょう。しかし、「神」を信じることでできない人々にとつて「大きなもの」は、人それぞれです。私にとつて、それは、若い時代に出会った偉大な芸術の力でした。昨年(二〇二〇年)、生誕二百五十年を迎えたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの音楽に、どれほど力を与えられ、生きる喜びを与えられたことでしょう。このように、人は、それぞれの関心の領域で、これは、という、「大きな力」に出会うことができるのです。そしてその、「大きな、最高の力」を受け入れることの中から、現にある自分の小ささの自覚と、大きな存在への感謝の気持ちも生まれるのです。

しかし、大切なのは、その「大きなもの」が、真にみずから委ねるに値するものなのか、という疑いを捨てないことです。ニーバーは、「祈り」のなかで、「変えられないものと変えるべきものを区別する賢さ」について書きましたが、それにならつて私は言いたいです。「大きいことはよいことだ」ではなく、ほんもの大きさ、にせもの大きさの違いを、しっかりと見定める賢さを身につけてほしいということ。それがひいては、自分という人間の小ささの自覚から来る偽りのない感謝の気持ちを生むことに繋がるのですから。感謝の思いは、それを伝える言葉の大切さの自覚に繋がっていくでしょう。表現それ自体は拙くもよいのです、肝心なのは、感謝の言葉の端々にゆきわたるデリカシーの輝きです。その輝きは、きっとほかの何にもまして皆さんの将来を切り開く「大きな力」となると思います。

真の意味での「大きな力」に触れようと努力すること、感謝の思いを通して、表現のデリカシーを学ぶこと、これは、皆さんの人生に与えられた永遠の課題です。

(亀山郁夫「人生百年の教養」による)

(注) *カストロロフイ (Castrophe) 突然起こる、大変動。ものが根底から覆されるような大きな変革(を招く、破滅的な出来事)。不慮の災厄。

問一 筆者は、「感謝の気持ち」が「レジリエンス」にどう「通じる」と考えているか。本文に即して二百字以内で説明しなさい。「受けいれる」という語を必ず用いること。

問二 これから二松学舎大学文学部であなたが勉学を通じて出会う何らかの「大きなもの」に対して、あなたはどのように向き合い、何を得たいと考えるか。「カストロロフイ」に臨んでの「レジリエンス」をテーマとしたこの文章の趣旨に即して、自身の考えを六百字以内で述べなさい。